都市計画事業家・根岸情治論

石川栄耀との関わりを中心として

Shoji Negishi - the project planner and the cousin of Eiyo Ishikawa

中島　直人**

By Naoto NAKAJIMA

根岸情治は、名古屋の区画整理の現場にて実務を身に付けた後、函館、京城の区画整理の現場を渡り歩き、その実現に貢献した。戦時中は、東京商工会議所で国土計画調査を担当し、終戦後、日本都市建設株式会社の役員、社長として、東京都の組合施行復興区画整理を推進した。このような歩みが、根岸を「都市計画事業家」として確立せしめたが、その仕事の集大成は池袋東口地下街建設であった。根岸の仕事は、人脈と業務に関する知識とともに、人間関係や人間心理を理解しようとする一貫した眼差しに深く根ざしたものであった。こうした根岸の履歴と業績は、従兄にあたる石川栄耀に導かれたものが多い。根岸は次第に石川の都市計画、国土計画の構想に欠かせない仕事のパートナーとなっていき、最終的には、根岸は石川栄耀についての評伝を著したことで、人間・石川栄耀の生みの親となった。

1　はじめに

根岸情治（ねぎししょうじ、1897－1971）とは一体何者か。根岸は、都市計画家・石川栄耀に関する最重要文献の一つとされる『都市に生きる　石川栄耀縦横記』(青年社、1956年）の著者であり、石川栄耀の業績に関する数多くの研究論文やエッセイの参考文献欄にその名を見ることができる。また、何れも復刻されている『都市創作』、『区画整理』、『新都市』といった都市計画プロパーのための雑誌の著者索引にも、彼の名（「葱青公」という筆名もある）がある。日本の植民地時代の朝鮮半島における都市計画の全貌を明らかにした孫禎睦『日本統治下朝鮮都市計画史研究』（柏書房、2004年）においては、「京城府の土地区画整理において一線の実務者であった根岸情治」、「京城府土地区画整理事業のもっとも中核的な立場にあった根岸情治」として、根岸の言説がたびたび引用されている。言ってみれば、都市計画史において、根岸はさして知られた人物ではないが、全く無名というわけでもない、有名と匿名の間に位置する都市計画家である。これまでこうした人物が都市計画史における都市計画家研究の対象とされることは殆どなく、根岸の履歴、業績の整理は行われてこなかった。

根岸情治は晩年、「おどろいたことに、直接都市計画の仕事をしていたのが前後約二十五年、友人の都市計画民間事業に関係していたのを加えると、なんと三十五年のながきにおよんでいる」（根岸（1969））とそのキャリアを振り返っているが、根岸を「都市計画家」と呼ぶことについては、少々、検討が必要である。根岸自身、自らを「区画整理事務家」「区画整理実務家」と呼ぶことはあっても、「都市計画家」と称することはなかった。というのも、「都市計画家」を「都市計画を職業とする者」と広く定義してみたとしても、実際にはその中心には、都市計画という社会技術の核となる計画や構想そのものをつくりだす技術に優れていたり、都市計画とは何たるかの哲学や思想を説き、他者に影響を与えていくような人物の像がある。しかし、本稿で明らかにしていくように、根岸はそういう技術や思想を持ち合わせていた人物ではなかった。根岸は、計画や構想を実現する際、特に都市計画事業を遂行する際に活躍したプロフェッショナルであった。戦後、根岸と仕事を共にした小笠原正巳は、根岸を「都市計画事業家」と呼んだ。根岸の仕事の範囲は必ずしも区画整理に留まらなかったし、その仕事内容を勘案するに、「都市計画家」というよりも、この小笠原流の「都市計画事業家」という捉え方が相応しいと思われる。この点からも、根岸は従来の都市計画史研究における人物研究では取り上げられてこなかった類の都市計画家であると言ってよい。

本稿は都市計画事業家・根岸情治の履歴と業績を明らかにすることを目的としている。都市計画事業家は、いわゆる技師やプランナーとは異なり、計画図や設計図にその仕事の真髄を込めるわけではなく、また論説論考によって自説を積極的に展開するわけでもない。従って、その存在は周縁的、他律的と見なされ、都市計画史においても見落とされがちであった。しかし、都市の計画や構想が実現するにあたっては、言うまでもなく制度や仕組みを巧みに活用し、地権者等の意向を汲みとり、公共的な観点からの事業内容と調整を図っていく人物がおり、その人物がいなければいかなる都市計画も日の眼を見ることはない。そうした人物を見ない都市計画史は都市計画の全体像を捉えているとは言い難い。例え、それが一般に「事務」と片付けられてしまうような仕事であろうと、人物アプローチによっ

*keyword：区画整理、都市計画事業、地下街、池袋
**非会員　博士（工学）　慶應義塾大学環境情報学部
（〒251-0052　神奈川県藤沢市遠藤5322））

てそこに属人的で人格的な性格を見出すことができるはずである。特に根岸情治は、都市計画事業家としてはおそらく例外的に自分の仕事について、適時、記録と解説を残しており、履歴や業績の追跡が可能である。本稿では、根岸及び根岸のような仕事をした人々に着目することで、「都市計画」の歴史的な実像に接近し、「都市計画」と人々とが結ぶ多様な関係性についての考察を深めていきたい。

また、本稿で根岸情治を取り上げる都市計画史的な意義は、石川栄耀研究の文脈からも説明される。石川栄耀の都市計画は、我が国の都市計画史研究において、特に近年、注目を浴びているテーマであるが、根岸の履歴や業績はこのテーマの深化に貢献すると思われる。石川栄耀の仕事は、果してどのような人々に支えられていたのか、石川栄耀はどのような人々を巻き込んでいったのか。石川の従弟にあたる根岸情治の振る舞いが、多くの情報を提供してくれる。

以下、本稿では第2章で根岸情治の履歴と業績を時系列で追い、明らかにしていく。第3章では、根岸が一線を退いた後に尽力した池袋駅東口地下街建設に焦点を絞り、根岸の仕事について詳しく見ていく。根岸が組織の一員としてではなく、一人の都市計画事業家として関わり、実際に実現させた事例となる。第4章では、本稿で得られた知見をまとめ、石川栄耀との関係についても考察を加える。

2　根岸情治の都市計画遍歴

（1）青年時代とその余韻

a. 根岸の生い立ちと石川栄耀との関係

根岸情治は明治30(1897)年、青森県の尻内で生まれた。実父母とも滋賀出身で、実父は鉄道技師であった。実父と同じく鉄道関係に勤めていた根岸鉄三郎に嫁いでいた実姉に子供がなかったため、生まれてすぐにその家庭にもらわれた。以降、養父・鉄三郎の転勤にともなって、平、水戸、八王子等を転々とした後、東京に移り、千駄ヶ谷小学校、目白中学と進んだ。根岸の養父・鉄三郎は石川栄耀の実父・根岸文夫、石川の養父の石川銀次郎の実弟にあたり、根岸と石川栄耀は従兄弟の関係であった。石川銀次郎と根岸鉄三郎は兄弟で共同して目白（東京府北豊島郡長崎村）に土地を求めたので、根岸と当時東京帝国大学土木学科の大学生であった石川とは隣家同士の関係となった。根岸と石川はともに養子という家庭環境の共通性もあり、4歳の年齢差を超えて深く付き合い、日常的に一緒に寄席を見に行ったり、旅行に出かけたりする仲であった。

根岸情治は目白中学を卒業した後、明治大学予科に進学した。根岸は当時、通っていた目白の福音教会で、後に明治大学卒業直前に学生結婚する将来の根岸夫人と出会った。目白中学時代の友人には、後に池袋東口地下街の建設で協働する地元の素封家の子息、岩崎賢吉がいた。根岸は野球少年としてならした一方、中学生時代に地元の友人たちと俳句の会を立ち上げるなど、文学青年でもあった。

b. 都市計画との接点と乖離

学生結婚をした根岸は、日本橋三越に就職したが、体調を崩し、2年ほどで退職した。その後、療養生活を送っていたところ、先に内務省都市計画名古屋地方委員会（後に都市計画愛知地方委員会）に技師として赴任していた石川栄耀に誘われ、都市計画名古屋地方委員会に勤務するようになった。その後、愛知県庁都市計画課での2年間の勤務も含めて、20代前半の4年間ほどを名古屋で過ごした。こ

表―1　根岸情治と石川栄耀の履歴に関する年譜

年		根岸 情治		石川 栄耀	
1893	明治20年			0	山形県に生まれる
1897	明治24年	0	青森県に生まれる	4	
1920	大正9年	23	日本橋三越勤務	27	都市計画名古屋地方委員会技師（1922年に都市計画愛知地方委員会に改称）
1921	大正10年	24	都市計画名古屋地方委員会勤務	28	
1923	大正12年	26	愛知県庁都市計画課勤務	30	
1924	大正13年	27	東京にて、葉間屋業、東京毎夕新聞記者、『人性』主筆、『金の船』編集、劇団監督等、職業を転々とする(～1928年まで)	31	
1928	昭和3年	31	名古屋にて、新屋敷土地区画整理事業組合、小碓土地区画整理事業組合、昭和土地区画整理事業組合の事務を担当(～1935年まで)	35	
1932	昭和7年	35	一宮市都市計画係主任　都市計画街路事業に従事	39	『都市動態の研究』(刀江書院)出版、処女作
1933	昭和8年	36		40	都市計画東京地方委員会技師
1934	昭和9年	37	北海道庁書記、函館の復興区画整理事業に従事	41	
1936	昭和11年	39	京城府土木科都市計画係、区画整理事業に従事	43	
1941	昭和16年	44		48	『日本国土計画論』(八元社)出版、以降終戦までに国土計画関係の著作を多数出版
1942	昭和17年	45	東京商工会議所調査部、国土計画に関する調査に従事（後に調査部主任代理）	49	
1943	昭和18年	46		50	東京都計画局道路課長
1944	昭和19年	47		51	東京都計画局都市計画課長兼務
1946	昭和21年	49	日本都市建設株式会社常務取締役、復興区画整理事業に従事（後に三代目社長に就任）	53	
1948	昭和23年	51		55	東京都建設局長
1949	昭和24年	52		56	工学博士(『東京復興都市計画設計及解説』)
1951	昭和26年	54		58	東京都参与、早稲田大学教授
1952	昭和27年	55	池袋駅東口広場に地下道設置許可申請(池袋地下街株式会社創立事務	59	
1953	昭和28年	56	日本都市建設株式会社解散	60	
1955	昭和30年	58		62	永眠
1956	昭和31年	59	『都市に生きる　石川栄耀追憶記』(作品社)出版		
1959	昭和34年	62	池袋地下道駐車場株式会社相談役		
1964	昭和39年	67	池袋ショッピングパーク開業		
1969	昭和44年	72	『旧婚旅行』(青年社)出版		
1971	昭和46年	74	永眠		

※根岸の年譜については、一部不明確な部分がある。特に、京城府土木科都市計画係までは、函館での北海道書記への就任年以外は根岸情治（1969）の148-149頁にある自筆の履歴項目等を参考にしているため、場合によっては前後1年、ずれる可能性がある。

の時期、根岸は都市計画地方委員会書記の木島粂太郎らの下で働いていたが、具体的にどのような仕事をしていたかは明らかではない。ただし、自宅も近かった石川や都市計画地方委員会幹事の黒谷了太郎ら、都市計画分野の先達から薫陶を受け、また、私生活上も親しく付き合っていた。しかし、根岸がこの時期に都市計画を一生の仕事に決めた、というわけではなかった。

根岸は27歳の春に愛知県庁都市計画課を退職し、東京に戻り、以降5年ほどの間、都市計画とは関係のない仕事を転々としている。東京に戻ったのは「東京に居た文学青年時代の或る友人が一緒に商売しながら文学雑誌を発行しよう」(根岸(1956c))という誘いに乗ったからである。根岸は友人と目白で薬問屋を開業したが、その事業はすぐに失敗した。その後、石川栄耀の実兄であり、根岸の従兄にあたる根岸栄隆の紹介で東京毎夕新聞に記者として勤務し、更に友人が関係していた出版業を営む人性社に参加した、根岸は人性社内に設けられた妊娠調節相談所幹事を務め、相談所の機関誌である『人性』の主筆として、雑誌の編集を担いながら、1927年には『妊娠調節の実際知識』と題した著書まで出版している。一方、根岸の文学方面での志向は、経営困難に陥っていた童話雑誌『金の船』の編集、この雑誌と連動した童話劇団や子供音楽団の主宰といった活動に結びついていた。根岸自身も『金の船』に童話作品を発表している。再建の努力空しく、『金の船』が廃刊になった後も、根岸は童話劇団を新劇団体へと発展させ、そのマネージャー、監督として運営を取り仕切った。名古屋を去り、故郷鶴岡で市長となっていた黒谷了太郎の斡旋で東北講演旅行に出たり、石川栄耀に世話になり名古屋でも講演を行うなど、かつて勤務していた都市計画地方委員会や県庁関係者のつてを頼りに活動を続けたが、名古屋講演での失敗が直接の原因となり、劇団は解散した。根岸は31歳になっていた。根岸は後に「この時代がもっともめちゃくちゃで、もっとも貧乏をした時代ではあったが、そのかわり、もっとも若者らしく、情熱のありったけをぶっつけた時代であったともいえる。もっとも自由奔放な、もっとも純粋な、もっとも正直な、もっともたのしかった時代だったのかも知れない」(根岸(1969))と回想している。

以上のように、根岸は都市計画に関係する専門の教育を受けた経験はなく、石川に誘われて県の都市計画課に勤務することもあったが、20代後半から30代にかけての5年弱は、記者、雑誌編集者、執筆家、童話作家、劇団主催者といった職業を転々とし、ある種の彷徨を経験した。この時代の仕事は、根岸の文学青時代の連続として理解できるが、一方で、その後の根岸の都市計画事業家としての仕事との関係では、編集や執筆、組織のマネジメントといった経験がその後の仕事の基礎となった可能性がある。何れにせよ、幾度もの失敗で、そうした方面での活動をあきらめざるをえなくなった。青年らしい彷徨の後に、必要にせまれられて、今度は真剣に都市計画と向き合うようになるのである。

(2)区画整理実務家としての修行と活躍

a. 名古屋における組合区画整理

情熱をかけた劇団が解散し、裸一貫からの出直しとなった根岸は、再び「彼(石川)の居候的」(根岸(1956c))な状態で、名古屋で仕事をすることになった。愛知県庁の区画整理係のベテランであった瀧口巌の斡旋で、まずは新屋敷土地区画整理事業組合(1927年12月1日事業認可)に勤務することになった。前任者の急な退職もあり、庶務主任として勤務することになったが、この時点では、根岸は区画整理関係の事務については「まったくの素人」(根岸(1939a))であった。結果として、庶務主任は根岸には重すぎる役割で、途中で主任からは降りることになったが、根岸は現場の仕事での必要に迫られて区画整理の勉強に専心した。換地設計の手伝いをしながら、まずは区画整理についての一通りの知識を身に付けた。

そして次に、小碓土地区画整理事業組合(1929年12月21日事業認可)に移り、設立認可が下りたばかりの組合の全ての事務を担当した。銀行、県庁、市役所、組合員との交渉、連絡に走り回り、「一生一代の一生懸命さ」(根岸(1939a))で、短期間のうちに起債認可、資金の借入等の事業立ち上げ期の事務をほぼ一人で成り遂げたのである。

その後、根岸は昭和土地区画整理事業組合に移籍した。岐阜の大地主で、建築や都市計画に造詣が深かった渡辺甚吉の一人施行による区画整理事業であった。ここでは堂々と事務主任として、事務整理、関係官庁との折衝、協議等を精力的にこなした。しかし小作農との協議が不調に終わり、この区画整理事業は中止となってしまった。

失業した根岸は、愛知県庁の斡旋で、一宮市に都市計画係主任として赴任することになった。一宮市では1932年10月に都市計画街路の事業決定がなされたところで、根岸に託された仕事はその都市計画事業の実現であった。根岸はここでも全く事前知識がなかった受益者負担や用地買収の仕事を、主任という立場で実際に用地買収の交渉等に取り組みながら現場で覚えていき、街路事業を予定通りに進めた。また、根岸は石川や兼岩伝一、児玉実といった県庁や地方委員会の技師たちの応援も得て、一宮での初の区画整理事業の実施も企画し、有力な地主たちの説得を試みたが、在職中に実現することはなかった。

b. 函館の復興区画整理

1934年3月21日に函館で大火が発生し、全市街の3分の1を焼失した。4月6日には、内務省、北海道庁の関係者が集まり、復興計画案大綱を決定し、区画整理事業の断行が第一に掲げられた。これを受けて、北海道庁の神尾守次技師は全国に呼び掛けて、区画整理実務に通じた人物を招聘した。一宮市で街路事業を順調に実現させていた根岸は、神尾の依頼に応じて、大火発生から一カ月に満たない4月中には函館に渡り、北海道庁書記に任ぜられた。函館での根岸の仕事は、区画整理事業の立ち上げであった。大火で焼失してしまった土地台帳の再作成から始めて、名古屋時代の小碓組合の業務経験を活かして、組合設立、換地設計前の準備全般を担った。そして、組合運営や換地設計を担当する他の区画整理経験者の来函が遅れている間に、根岸は、講演、放送、パンフレット、ポスターの作成、「区画整理映画大会」の開催など、あらゆる手段を使って、市民への区画整理の意義の啓蒙、浸透を図った。一方で、根岸は組

合同意書を迅速にとるために、説明会の出口に机を並べて半ば強制的に判を押させるなど、硬軟の姿勢を織り交ぜて仕事に取り組んだ。

函館の区画整理では、当時の移転係長のミスで、換地に伴う移転補償金が予算に見積られておらず、急遽、換地の協議変更や換地後の敷地境界をまたがる建築物の据え置きを土地所有者と建物所有者の間で協定を結ばせることで必要な補償金を削減することになった。当時、すでに根岸の仕事が評価されていたことは、この協定係員に真っ先に選ばれたことからも分かる。協定締結には外交的な能力が必要とされたが、根岸は目参に目参を重ねる戦術で、次々と協定を実現させ、補償金をほぼ無しにすることに成功したのである。

c. 京城の府施行区画整理

朝鮮では、日本本土と満州国との経済的な輸送路の朝鮮半島側の拠点港湾都市として、羅津の計画的な市街地造成が必要とされていた。この要請に答える形で、1934年6月20日付けで朝鮮市街地計画令が制定発布され、同7月27日には同令施行規則も発布された。そしてすぐに羅津で同法が適用された後、1936年3月26日になって、京城でも計画区域が告示され、いよいよ朝鮮の都市計画が実施に移されようとしていた。限られた予算の中で都市計画を実施するため、その主力は市街地計画令の中に規定が盛り込まれた土地区画整理事業であった。市街地計画令制定作業では、名古屋の区画整理の指導者であった岡崎早太郎が招聘されたが、その後も、朝鮮における区画整理の実施にあたって、名古屋の土地区画整理事業の実務に関わった者が次々と総督府や京城府に招聘されたのである。それは技術者だけでなく、根岸が最初に都市計画名古屋地方委員会に赴任した際の上司・木島粂太郎（京城府都市計画課庶務課長）、新屋敷組合の仕事を根岸に斡旋した瀧口巌（朝鮮総督府都市係）らの事務方もである。そして、根岸も函館の協定係としての任務を果たした後、海を渡ることになった。

根岸は京城府土木課都市計画係を拝命し、京城府施行の区画整理の遂行に従事した。朝鮮市街地計画令の規定では、民間組合施行の区画整理は事実上認められておらず、全て京城府による半ば強制的な区画整理の施行となった。そして、市街地計画令適用からわずかな期間に約1500万坪もの区画整理区域を指定し、実際に順次実施し始めたのである。そうした極めて仕事量の多い環境の中で、根岸は区画整理実務家として活躍したのである。

根岸は京城の区画整理についての論考を幾つか当時の雑誌に発表している。根岸は朝鮮の区画整理の特徴である、徹底的な行政庁主導の仕組みについて、土地所有者との交渉の手間が省けてやり易いという当時の技術者たちが抱きがちであった評価に対して、「土地所有者の鼻息をうかがうと、うかがわぬとに拘らず、土地所有者の立場になって、仕事をしてやらなければならない事に論はない」「官僚独善の独りよがりも、決して感心したものではない。民意のない事業などと云うものは、結局、お伽話にしか過ぎないのではないか」（葱青公（1939d））と批判を加えている点が注目される。後に根岸は東京の戦災復興における組

図―1　根岸情治作・朴得錞画『区画整理物語　大地は微笑む』（1940年）

合区画整理や池袋駅東口地下街で都市計画事業の民間代行を手伝うことになるが、その根底にはここで思わず吐露したような、民意に支えられた都市計画への共感があったものと思われる。

根岸は一つの都市では自身最長となる7年もの年月を京城で過ごしたが、その間に幾つかの新しい試みに関わっている。京城では区画整理に伴う負担金や清算金等への理解がないまま、区画整理施行中から土地が不安定な価格で売買され、混乱をきたしていた。京城府はこうした事態を問題視し、土地の適正な利用、円滑な処分を目的とした土地相談所を設置した。また、合せて土地所有者に土地分譲組合を設立させ、適正な公表価格での売買を義務付けさせたである。根岸はこうした相談所や組合の規約の立案や運営を担った。更に土地の売買を進めるために、京城府として、パンフレット、ポスター、立看板、新聞広告、電車内広告、展覧会開催、紙芝居、講演会（石川栄耀）、出張宣伝等、不動産会社に負けないほどの様々な宣伝事業を担当したのである。中でも、根岸らしさが最もよく出ているのは、1940年4月の京城府都市計画課主催の都市計画展覧会にて、区画整理の宣伝のために使用した紙芝居「区画整理物語　大地は微笑む」である（図―1）。劇団時代の経験を活かしたのであろう。展覧会で最も好評を博したという。

（3）戦時下国土計画から戦後復興区画整理へ

a. 東京商工会議所での国土計画調査

1940年9月に「国土計画設定要綱」が閣議決定されたのを受けて、東京商工会議所でも1941年1月に国土計画調査委員会を設置し、1941年9月には関東地方基本計画試案を策定した。そして、関東地方基本計試案に基づき、関東諸県の商工会議所と関東地方商工会議所国土計画協議会を立ち上げ、関東地方諸都市工業立地条件基礎調査を開始することになった。当時、内務省都市計画東京地方委員会にいた石川栄耀は、東京商工会議所の参与としてこれらの委員会に関わっていたが、この国土計画関連の調査が開始さ

れる際に、根岸情治を担当者として推薦したのである。

根岸は1942年3月から、東京商工会議所調査部員として、戦時体制下における工場分散のための工場適地調査として、毎月の３分の２以上は関東諸都市への出張にあて、飛び回ったのである。根岸はこの時期、数多くの調査報告を書き、雑誌にも記事を書き、精力的に工場分散施策の意義と可能性を説いた。1943年1月からは東北地方においても工場適地調査を開始した。1943年8月には、東京商工会議所と東京市政調査会は共同で、「国土計画に即応する大都市の疎開工業の分散に基く地方自治体の行政、財政、経済其他之に関連する諸般の整備に付研究、指導、斡旋する」（根岸（1943f））ことを目的とした国土計画整備会を発足させた。この整備会の委員には東京商工会議所や東京市政調査会の参与が役員として参加したが、石川栄耀も両会の参与として名を連ねた。この国土計画整備会を幹事として運営全般を引き受けたのが根岸であった。国土計画整備会は1944年には「関東地方国土計画整備要項」を策定し、根岸はその内容を東京商工経済会（1943年9月に東京商工会議所から改組）の機関誌『商工経済』に発表している。この「関東地方国土計画整備要項」は関東地方全般にわたる秩序ある経済圏、生活圏の確立を大きな目標として、特に工場分散による国防、経済、社会上の混乱に対する徹底的整備計画の樹立を目指したものであった。同時期、よく知られているように、石川栄耀は「生活圏」を重視した地方計画、国土計画論を展開していたが、根岸のそれは、この石川の生活圏構想に影響を受けつつ、そこに経済圏の検討も加えたものであったと位置付けられる。

根岸は京城から本土に戻った理由を「一家の都合上」（根岸（1942a））と説明していた。しかし、同時に、「それにしても、十五年に近い区画整理実務家としての経験は、あっちに躓き、こっちに躓き乍らも、門前の小僧の何とやらで、区画整理に対する一応の概念は心得ましたものの、さて、時代の大きな変転に直面して、国家の経済的動向の革新から、それに伴う将来の土地政策の見透しを考えてみますと、これ迄の貧しい経験がはたしてどれ程のお役に立つ事やら、少々疑わしくも考えられるものであります」（根岸（1942a））という思いも書き遺していた。また、「私は長年、一つの仕事に従事してきた。その為に約2年近い年月を過ごしてきたと云っても決して過言ではない。幸な事に、それが今の仕事の何パーセントかの役割を持たせている。然し、外の何十パーセントを如何にして体系づくべきであろうか」「私は、その（注：国土計画の）深さの探求を、今後一生の任務としよう。」「自分の子供達に「お父さんは、これ丈の仕事をした」と、云い残せるだけの事をしよう。それが為に、十年や、二十年の努力は必要とするかも知れないが…」（青葱公（1942c））とも書いている。石川栄耀がこの時期、時代の要請に応えるかたちで、国土計画、地方計画の研究や実践化にかなりの力を注いでいたことをよく知られているが、根岸もやはり変わりゆく時代の中で自分がどう社会に貢献できるかと自問し、これまでの区画整理の実務という慣れ親しんだ仕事を離れて、45歳にして新しい仕事に打ち込み、「連日の空襲下、危険にさらされ乍ら、私はあっちこっちと全国をかけめぐった」（根岸（1956c））のである。

b．東京都の組合施行の戦災復興区画整理

終戦後、根岸は引き続き東京商工経済会に籍を置いていた。根岸は石川栄耀から「帝都復興計画図案懸賞」のアイデアの相談を受け、すぐに商工経済会内での調整をはかり、実現させるなど、石川が責任者となって進めていた東京の戦災復興計画に協力した他、調査部長代理として、残存の工場調査や経済調査等を指揮していたが、商工会議所内の労働運動の激化の責任をとり、辞職することになった。

その後、一時、全国の観光道路建設を目的に設立された観光事業協会の創立事務に参画したものの、うまく進まず、結局、日本都市建設株式会社に常務取締役として参画することになった。日本都市建設株式会社は、復興院の積極的な支援のもと、民間による復興事業の遂行を目的とし、1946年7月に社長に益田信世（元小田原市長、三井物産の益田孝の次男）を迎えて設立された。当初より、戦災復興土地区画整理事業の実施を目的と定め、その方面で実務経験の豊富な根岸が全国から、特に朝鮮や台湾等で活躍していた専門技術者120名を召喚したのである。特に、当時、東京都都市計画課長（後に建設局長）であった石川栄耀と密に連携し、東京都で組合施行の区画整理事業を興すべき宣伝啓蒙活動を担った（※根岸によれば、組合施行だけでなく、東京都施行分の代執行も視野に入れていたとのこと（根岸（1956c））。そして、実際に設立された６つの土地区画整理事業組合のうち、4地区（六本木、谷端、恵比須、西大久保）で事業の代行契約を結び、土地区画整理事業に関わる一切の業務を行うことになった。しかし、その資金面での算段として、当初事業費の8割が想定されていた国庫補助を当てにしていたが、実際にはドッジラインによる緊縮財政等が生じ、資金繰りに困難が生じた。業務が滞る状況で、役員も次々と辞任していった。そして、根岸は益田、平野貞三に続く三代目社長に就任し、個人的な借入まで行い、なんとか第一期事業を完成させたのである。その後、根岸は建設省、東京都に清算助成金の支払いを申請したが、手続きは遅延し、最終的には、東京都知事に行政訴訟を起こした。結局、石川栄耀が局長を退いた後に都からの助成金支出が決まり、それを受け取って会社は解散となった。しかし、銀行からの借入金返済、元職員たちへの賃金支払い等のトラブルで、1953年の年末から正月にかけては、一時身を隠さないといけないほどの状況に追い込まれるなど苦労を重ねた根岸は、この会社の清算を終えた後、第一線を退き、以降は自由業に徹することになった。

3　池袋駅東口地下街の建設

(1) 池袋駅東口地下街の概要と『池袋風雲録』

池袋駅東口の駅前広場下に展開する地下街は1964年9月に池袋ショッピングパークという愛称でオープンし、現在でも池袋東口の商業拠点の一つとなっている。地下1階には2本の公共通路とその両脇に多様な個店が並び、更に地下2階には170台近く収容する駐車場となっている（図―2）。この池袋駅東口地下街の建設事業の準備段階から建設後

の運営段階まで長期にわたって事務職員として関わった小笠原正巳は、工事着工後に『新都市』に寄せた記事において、「なお、終りに当って私が今日この事業を担当し、ともあれ竣工を果し得たのは、都市計画事業家の先輩であり、かつ、故石川栄耀博士の姻戚関係にある、根岸情治氏を始め、その他の方々に強力な御支援と御鞭撻のあったことと、佐藤武夫設計事務所並に藤田組の関係者の皆さんの熱心な御協力をして下さった方々に負うところが、多大であったことを思いここに重ねて深く感謝申し上げる次第です。」（小笠原(1964)）と謝辞をささげている。

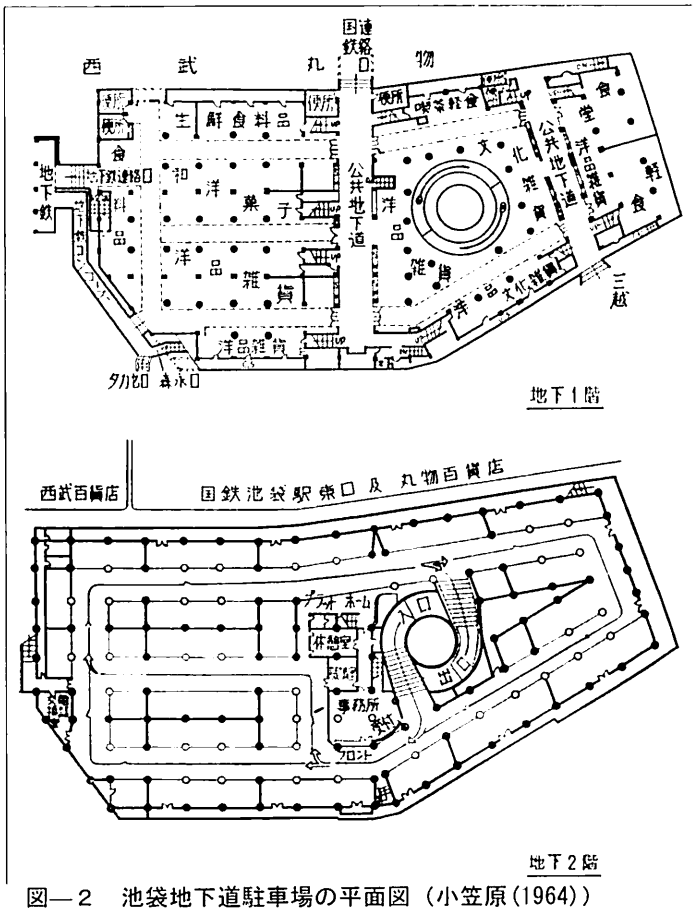
根岸はこの池袋駅東口地下街の建設に、その当初の構想段階から建設段階まで継続的に関与し、その竣工と同時に、私家版として『池袋風雲録　池袋地下街の出来るまで』を著し、建設までの10年近くの経緯を書き残している。

本章では、主にこの『池袋風雲録』をもとに、根岸がおそらく最後に手掛けた事業であり、また組織から離れて一都市計画事業家として関わったこの池袋地下街の建設事業を通じて、根岸の仕事を詳細に見ていくことにしたい。

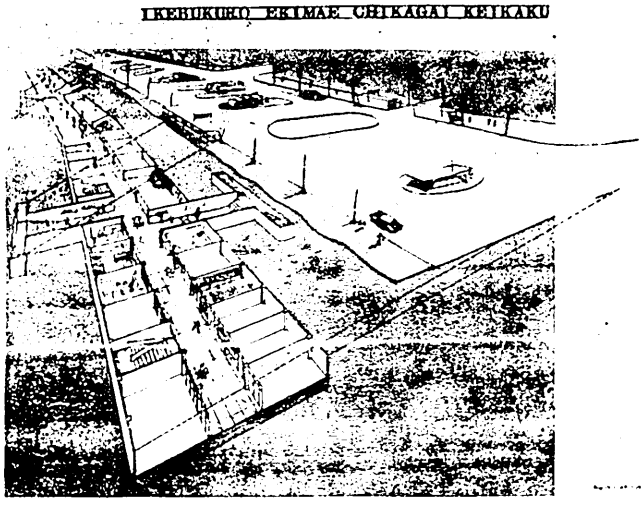
（2）池袋駅東口地下街建設の経緯と根岸情治の関わり

a. 地下街構想の発端と建設の請願

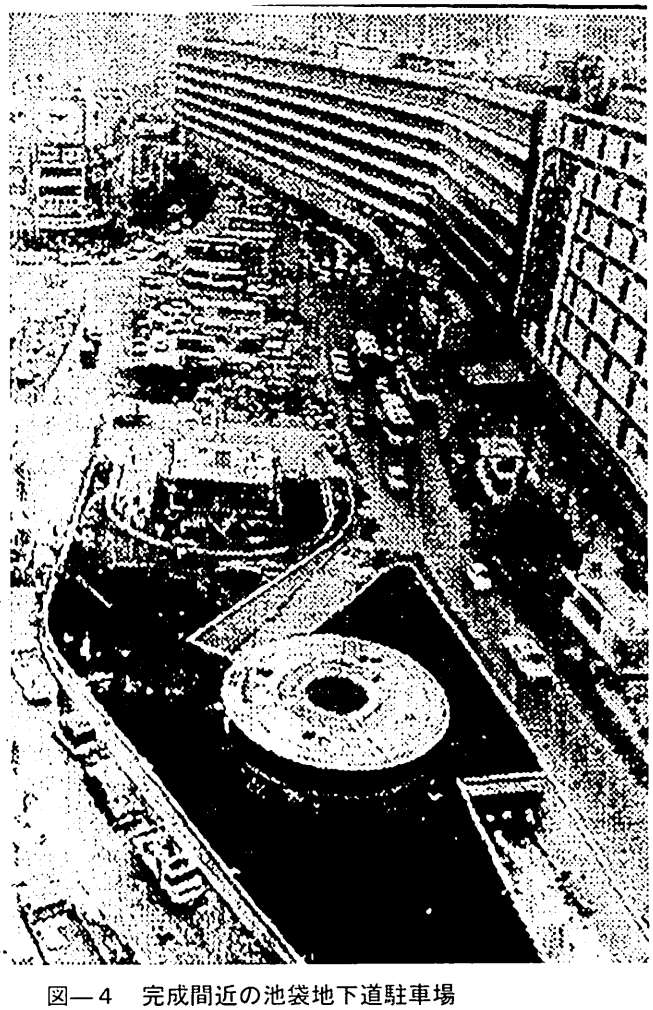
正確な時期は不明であるが、根岸は池袋駅東口地下街に関しては、石川栄耀から相談を受けたのが端緒であったと書き残している。東京都建設局長であった石川は、池袋東口地区の復興区画整理に合わせて、地区の将来像を示すマスタープランを作成するなど、この地区に大きな関心を注いでいた。石川は、区画整理で新たに生み出されることになる駅前広場の地下に商店街を設置し、地上の交通を整理することで、駅前に「美しく楽しい市民広場」を生み出そうと考えていた。石川は自ら設計図を作成し、根岸もそれに協力したのが、この構想の始まりであった。石川がどのような地下街を当初構想していたのかは明らかではないが、この時期、石川に諭されて民間都市計画家第一号となり、石川に依頼される様々な仕事を引きうけていた秀島乾が、「池袋駅前地下街」の設計を、東京都の地下建設物に関する条例の検討というかたちで行っている。1951年2月との日付が入った秀島の「池袋駅前地下街計画」では、新



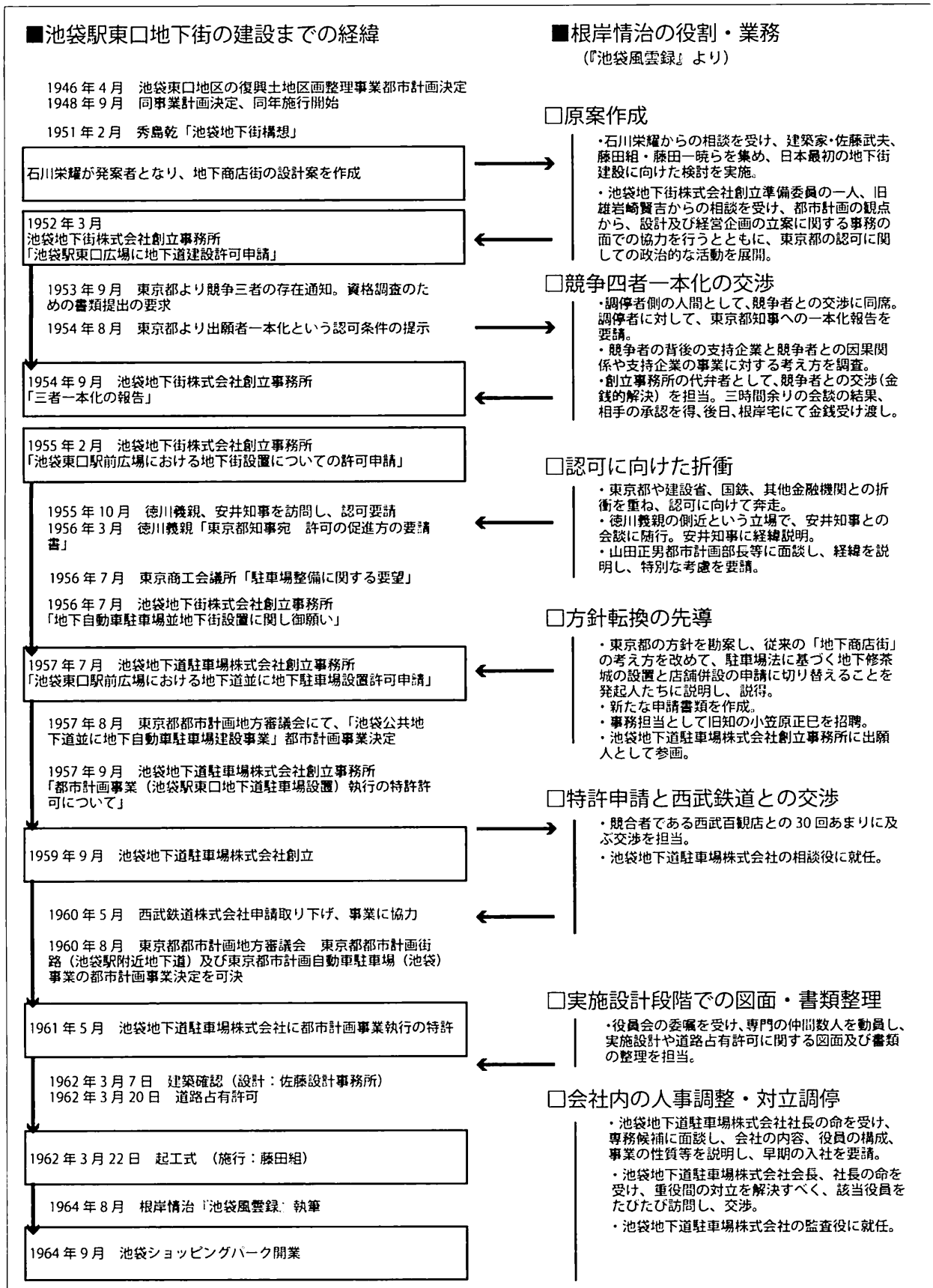
図―2　池袋地下道駐車場の平面図（小笠原(1964)）



図―3　秀島乾「池袋駅前地下街計画」（1951年）
（秀島乾（1955）、「駅前広場計画試案」、）



図―4　完成間近の池袋地下道駐車場
（『朝日新聞』、東京版、1964年8月29日）



図―5　池袋駅東口地下街の建設経緯と根岸情治の役割

たに開通する地下鉄や百貨店、バスバース等を結ぶ歩行者動線を幅員6mの歩道として地下に確保し、その両側に間口3m奥行き8mのユニットの店舗を並べるというものであった（図―3）。

当時、本格的な地下商店街はまだ日本になく、設計上、施工上の慎重な研究が必要と判断した根岸は、戦後の商店街復興を目的として組織していた商店街研究会の縁で、建築家の佐藤武夫に協力を求めるとともに、建設業界にも声

をかけ、藤田組の副社長であった藤田一暁の参画を得て、石川栄耀を中心とした検討会を1年ほど続けたのである。

そうした検討を続けていた最中、根岸は池袋の地元関係者からも、池袋鉄道会館（現ステーションビル）と地下街建設への協力を求められた。鉄道会館の重役を務めていた目白中学時代の同級生で親友の岩崎賢吉から、鉄道会館への百貨店誘致に関する相談（根岸は東京商工会議所時代に、所長の藤山愛一郎の思顧を受けていたので、その人脈が期待された）を受けたのと同時に、鉄道会館側が東京都に提出を予定していた地下街建設の申請についてもアドバイスを求められたのである。

根岸のみならず、石川と岩崎ももともと良く知った関係にあり、石川を中心とした地下街研究と地元有志による地下街建設申請とが自然と連動することになった。そして、1952年3月14日には、地元関係者を準備委員とした池袋地下街株式会社創立事務所名で、東京都知事に対して「池袋東口広場に地下街建設請願」を提出するとともに、国鉄と帝都高速度交通営団に対しても同種の請願をした（表-2）。請願書によれば、地下街建設事業は、広場の動線整理を主眼としつつ、池袋地区の商業的繁栄も目指したものであった。東京都施行の復興区画整理において、地権者たちが大幅な減歩を受け入れ、広大な駅前広場の創出に協力したことに対する見返りを要求するという側面もあったと考えられる。なお、この請願の時点では、石川は既に東京都建設局長を退いており、後方支援に回ることになった。

b．競争者との調整と東京都の認可に向けた交渉

しかし、請願を行った後、岩崎ら地元関係者が組織した池袋地下街株式会社創立事務所以外に、他に3者が地下街建設を目指していることが発覚した。1954年8月には東京都の方針で、競合者間での調整の上での一本化が許可の条件とされた。石川栄耀がその人脈を生かして仲介役を買って出たが、根岸も競争相手との直接交渉、特に手切れ金等の裏側の交渉を実際に担当し、競争者間の調整を成功させ、最終的な一本化を達成した。そして、1955年2月には、元競争相手も発起人に追加して、改めて、池袋地下街株式会社創設事務所として「池袋東口駅前広場における地下街設置についての認可申請」を提出したのである。

許可申請書提出後、東京都からの認可はなかなか下りなかった。根岸は「幾度か東京都や建設省、国鉄、其他金融機関等をかけめぐり、認可右における諸般の準備に専念」（根岸（1964））した。根岸や岩崎が長く親しく付き合っていた徳川義親に、安井東京都知事への直接の認可要請を行ってもらうなど、様々な手段をつくし、当時の角田建設局長から認可する旨の内意をもらうところまで行ったが、角田局長の急病、退職という不測の事態もあり、その話も頓挫してしまった。

根岸は当時の都市計画部長であった山田正男に面会し、事業認可を求めるなどの交渉を重ねる中で、東京都は都内の交通事情の悪化を背景として、単なる地下商店街ではなく、地下駐車場の都市計画事業としての建設を検討していることを把握した。実際に山田はアメリカ、欧州に駐車場の視察に出掛け、都心部における駐車場の計画を検討していた。建設省も1957年2月の第26回国会での通過を目指して、都市における駐車場整備を促進する駐車場法案の用意を進めていた。東京都内では、東京駅近辺での都直営や道路公団経営の地下駐車場に加えて、新宿、池袋でも地下駐

表―2　池袋地下街株式会社創立事務所による地下街建設請願の趣意（『経緯書』より抜粋）

■「池袋駅東口広場に地下街建設請願建」（日本国有鉄道総裁・東京鉄道管理局・東京工事事務所所長宛て/池袋地下街株式会社創立事務所、1952年3月14日）

一、池袋駅東口側は区画整理事業が著しく進捗し宏大な広場が完成しました。そのために徒歩通行者は横断が困難となりその対策が必要となって参りました。

二、帝都高速交通営団の地下鉄道新設工事も着々と進捗して居りますがこれが完成の暁には乗降人員の増加が予想されて、その乗降又は広場横断に特別の対策が必要となります。

三、本計画は別紙の通り国鉄池袋駅東口本屋と地下鉄池袋駅とを結び又駅前広場下を横断し正面反対側に出る通路並に広場下を横断する通路を設置するものであります。

四、本地下道は将来改築される国鉄池袋本屋の地下室と連結し又地下鉄池袋駅には中二階でつながるものであります。

五、この地下道の両側は店舗とし一般の利用に供し池袋地区の繁栄の一助としたい考えであります。尚この店舗は池袋地区の区画整理によって地積の減少したもの又は立退を要するものの収容地の一部に充当したい考えであります。

以上の趣旨でありますが、これが完成すれば池袋駅に出入の旅客に大なる利便を与うることとなりサービス上有意と存じますので何卒御審議の上御承認下さる様御願申上げます。

尚本件については東京都に対し事業認可の申請を致して居ります。又本件に関する目論見書、設計図、其他準備中ですから完了次第御提出致します。

■「池袋東口広場に地下道を建設する計画の趣意書」（東京都知事宛て/池袋地下街株式会社創立事務所、1952年3月26日）

池袋駅東口本屋前広場下に建設計画中の地下道は、次の趣意のものである。

一、池袋駅東口側は区画整理が著しく進捗し宏大な広場が出来た。そのため徒歩通行者の横断が困難となりこの対策が必要となった。

二、地下鉄の新駅工事は着々と進捗しているがこれが完成した後は交通量の増加が予想され、これら旅客の乗換又は広場横断に対し対策が必要となる。

三、地下道の計画は国鉄池袋駅東口本屋と地下鉄池袋新駅とを結ぶのを主眼とする。即ち国鉄駅と現在の地下道から直にこの地下道に入り広場を通り地下鉄池袋駅の中二階に至るものである。

四、この地下道の一部駅に接続する部分は将来池袋駅本屋が池袋交通会館として改築されて大ビルデイングになった場合はその地下一階と高さを同じく地下室の一部となるものとす。

五、地下道は通路幅員を六米その両側に店舗を奥行六米を基準として設置する。

六、地下道は駅本屋反対側の歩道並びに広場の中心部にあるバス発着場とに出入口を設ける。

七、地下道の店舗には区画整理其他によって移転を命せられた店舗を収容するを原則とする。

車場を設置する計画となり、特に池袋については、民間からの地下街設置の申請があるため、民間に地下道と地下駐車場を設置させ、その附帯事業として店舗敷設を認めるという方針が決定された。

根岸はこうした東京都の方針を踏まえて、「思い切って「地下商店街」の考え方を変えて、駐車場法に基く地下駐車場の設置と店舗併設の申請に、その内容をきりかえるべきである」(根岸(1964))と判断し、徳川や岩崎らを説得し、方向転換を承認させた。そして、急遽新たな申請書の作成を開始した。我が国で初めての民間駐車場建設事業であったため、経営計画、建設費、収支予算等の算定等に相当の苦労と時間がかかった。1956年7月25日には山田部長に「池袋駅地下二階自動車駐車場建設について」という声明とともに関係書類を提出した。この時点では、駐車場整備についても協力する意思があることは表明したものの、あくまで地下商店街建設が最優先で、補助金がもらえれば駐車場も同時に整備するといった内容であった。また、都との交渉に加えて、東京商工会議所の協力を求め、東京商工会議所からの「駐車場整備に関する要望」(1956年7月19日)というかたちで、駐車場整備を民間が代行する場合の、固定資産税の免除や道路占有料の減免、建設資金の長期低利金融の斡旋等の助成を請願したのである。

c. 池袋地下道駐車場株式会社による特許獲得

しかし日を追うごとに都内の交通事情は悪化する中、東京都が実際に駐車場建設に着手し始めた段階で、発起人たちは駐車場建設を主眼とする方向へと完全に舵を切ることとし、池袋地下街株式会社創立事務所から池袋地下道駐車場株式会社創立事務所へと名称を変更した。これまでの一民間事業ではなく、都市計画事業という公共性の強い事業の代行を目指すことが明確となった。そして1957年7月に池袋地下道駐車場株式会社創立事務所として正式に「池袋東口駅前広場における地下道並に地下駐車場設置許可申請」を都知事に提出した。翌8月には池袋の地下駐車場の都市計画事業決定がなされたことを受けて、9月にはその都市計画事業の特許を申請するに至った。

根岸は当初より、地下街建設の運動を常に裏方から支えていたが、特許を申請する段階で出願人の一人に名を連ねることになった。申請書類に添付された「出願者略歴書」には、徳川義親や岩崎賢吉などの地元の発起人たちの他、会社の信用力を増すため三名の参議院議員も名を連ねていたが、その中にあって、根岸の肩書は「東京、北海道、愛知県、朝鮮に於て都市計画事業担当　元日本都市建設株式会社々長」(『経緯書』)というものであった。根岸の都市計画事業家としてのこれまでの長いキャリアが、都市計画事業である駐車場建設の代行の特許を申請する際に、会社の信用力と考えられたのである。

また、特許申請という段階になって、外部折衝や企画書、設計書等の通常事務以外の業務が一気に増加したことを受けて、根岸は、1957年中に設計事務に精通し、かつて根岸が社長を務めた日本都市建設株式会社で業務部長をしていた小笠原正巳を事務局に招聘した。根岸は、日本都市建設株式会社での都市計画事業の代行経験を、池袋地下道駐車場株式会社で直接、活かすことを目論んだ。そして実際に、小笠原は「当時の小笠原の奮闘は察するに余りがあり」(根岸(1964))と言わしめるほどの活躍を見せたのである。

しかし、特許はすぐには下りなかった。実は特許申請を行った段階で、競合者として西武鉄道が現れ、調整が必要とされたのである。西武側は地下二階分の駐車場のみの建設を申請しており、地下一階を店舗、地下二階を駐車場とする池袋地下道駐車場株式会社創立事務所の計画よりも都市計画事業の趣旨に沿うものであったため、創立事務所側は厳しい立場に置かれることになった。そこで、主に根岸や小笠原が堤清二率いる西武百貨店との折衝を担当し、1年以上にわたる30回以上の会合を経て、西武を創立事務所側の事業に参画させることに成功したのである(正式には1960年5月に西武は申請を取り下げた)。

特許獲得がほぼ見えてきた1959年9月になって、池袋地下道駐車場株式会社がようやく設立され、根岸は相談役に就任した。その後、東京都からの役員構成に関する指導等に対応し、結果としては、1961年5月24日に、都市計画法第5条第2項及び同法施工令第7条に基づく特許が池袋地下道駐車場株式会社に与えられたのである。

d. 実施設計から着工、そして開業

池袋地下道駐車場株式会社は、特許を受けてすぐに、実施設計を佐藤武夫率いる佐藤設計事務所に依頼し、施行業者として藤田一暁が副社長を務めていた藤田組を選出した。事業発起の当初、佐藤武夫と藤田一暁は根岸の誘いを受けて、石川栄耀を中心とした検討会に参加して以来の池袋との付き合いであった。池袋地下道地下駐車場の設計にあたっては、駅前広場にバス及びトロリーバスの路線が15本が集中しており、更に地下1階に店舗を入れ込み、駐車場は地下2階とするという厳しい条件の中で、設計面においては、佐藤武夫が入出車路の面積を極力少なくし、地下1階の店舗面積を最大限に確保し、かつ駐車場としても入出口を近づけることが可能となり管理をしやすくするという複式ラセン型車路(ダブル・スパイラル)という新方式を開発した。給排気塔を軸に入車路と出車路が絡み合う形式で、更に給排気塔自体も駅前広場地上におけるシンボルとして、お碗型にデザインされた(図-2、図-4)。また、施行においても、藤田組は、工事中の駅前の交通への影響を最小限にするため、仮設工事を少なくし、路面開放も容易なフローティングアイランド工法を研究の上、採用することとした。つまり、根岸が10年前に声をかけた専門家たちが、これまでにない商店街併設型の地下駐車場の建設に対して惜しみなくアイデアを出し合い、優れた都市空間の創造に協力したのである。1962年3月7日には確認申請がおり、3月22日に起工式を催し、着工された。

この最終的な局面において、根岸もまた、「会社事務担当者は小笠原1名だけであった為、役員会の委嘱を受けて、私が之に参画し、私はまた専門の仲間数人を動員して、大蔵に及ぶ図書及書類の作成に努力した」(根岸(1964))のである。更にその後も、開業までの間に、池袋地下道駐車場株式会社内では、役員人事や店舗部分の権利関係の配分を

巡って、重役間の対立が表面化し、分裂の危機を迎えたが、初代社長の岩崎や、初代会長から二代目社長となった徳川を支えるかたちで、根岸は社内で調整役として動き続けた。

以上のような経緯で、1964年9月2日に、池袋ショッピングパークは開業を迎えたのである。池袋地下街株式会社創立事務所名で、東京都知事に対して「池袋東口広場に地下街建設請願」が最初に提出されてから、12年の年月が経過していた。そして、根岸は開業直前の8月に、事業の発端から竣工に至るまでの経緯、特に「長期間に亘る推移の中から、さまざまにゆがめられつくした不幸な出来事に対し、せめて、一つの筋道を明らかにしておき度い」（根岸(1964)）という考えのもとで、『池袋風雲録　池袋地下街の出来るまで』を書き上げたのである。『池袋風雲録』には、本稿では具体的には取り上げなかったが、根岸から見た（根岸は「第三者な冷徹さを持って」としている）様々な人物に対する人物評や、長い経緯の中で生じた齟齬や誤解に基づく対立の背景、要因に関する考察等が書き連ねられている。人間関係や人間心理の不可思議さに対しての真摯な考察こそ、都市計画事業家としての根岸の真骨頂であったと考えられる。ただし、根岸は何れの人物や対立に関しても、中傷や非難はしていない。『池袋風雲録』には、それぞれの人間を理解しようとする眼差しが貫かれている。

4　まとめ

（1）都市計画事業家としての根岸情治

以上、見てきたように、根岸情治は、30代過ぎからの名古屋の区画整理の仕事の現場にて、区画整理実務を身に付け、その後、その実務の能力を活かして、函館の復興区画整理を経て、京城の区画整理の実現に大きく貢献したのである。そうした経緯の中で、区画整理実務家としての評価を得ていったのだが、こうしたキャリアが根岸に特殊なものであったわけではない。根岸は「区画整理遍路記」(1939年）において、名古屋や函館等の各仕事の現場の同僚（技術者も事務屋も）についても言及しているが、その多くが当時、朝鮮で活躍していることを紹介していた。技術者だけでなく、事務係も現場で技術を蓄えながら、キャリアを形成していったのである。根岸の仕事から見えてくるのは、事務係の仕事は単なる書類の処理ではなく、地権者への連絡や交渉といったマネジメント、様々なメディアを通じた啓蒙活動が多くを占めているということである。そうした仕事を、根岸は、文学青年時代の文筆経験から組織運営までの素養や経験に基づいて、創意を加えながら取り組んだと考えられる。区画整理関係の事務というと、一見すると定型的な業務と片付けられがちであるが、実際にはそれぞれの担い手たちによって確かに生きられた、様々な試みの蓄積であった。そして、そうした試みの総体が「都市計画」として社会的に存在していたのである。

また、根岸がこうした区画整理実務を通じて、官僚独善ではない、民意の存在が事業の基礎であると主張していたことは、重要である。特に、当時から現在まで、しばしば都市の計画や設計そのものが、その実現度合いも含めて評価の主対象となりがちなのに対し、根岸はいかなる計画も設計も民意との結びつきがなければ虚構であると自然と言えたのは、根岸がいわゆる技術者ではなく、事務屋であったことと関係しているのかも知れない。

根岸はその後、東京商工会議所での国土計画調査を担当することで、通常の区画整理実務家とは異なる視野や経験を獲得している。根岸が区画整理実務家のからを抜け出すことが出来たのは、時代に関する敏感な感覚を持っていたからであった。統制的な土地政策下で区画整理が社会的な有効性を失いつつあると見て、自分の経験の中にはない新しい方法での社会への、時代への貢献を求めて行動したのである。工場分散を命題として、受け入れる各自治体と移転する民間企業とのマッチングを担当した。その後、戦災復興というまたもや大きな社会的使命のもとで、日本都市建設株式会社の役員、そして社長という立場で、民間企業による組合事業代行という新しいスキームの構築に奔走したのである。最終的には不安定な経済条件のもとで失敗するのだが、これらの戦時中から終戦後のキャリアを通じて、根岸は豊かな人脈とともに、民間の視点から、都市計画事業をどう動かすのか、その要領を得たものと思われる。

このような区画整理実務家の枠を超えていった戦時中以降の歩みが、根岸を「都市計画事業家」として確立せしめたのである。根岸の「都市計画事業家」としての仕事は、池袋駅東口地下街建設で集大成されたと見てよい。そこでの仕事は、根岸の言葉を借りれば、「都市計画より見た、地上、地下の設計と、経営企画の立案」「事務的なこと」に留まらない、「認可に対する政治的活動」をも含む、状況に柔軟に応じた行動であった（根岸(1964)）。根岸がこれまで培ってきて人脈と業務に関する知識がそうした行動を可能としたのは間違いないが、一方で、もっと根本的なところに根岸の仕事の礎が築かれていたようにも思える。それは根岸の人間観＝人間関係や人間心理を理解しようとする一貫した眼差しである。根岸の人間を理解する力、理解しようとする意思については、石川栄耀についての評伝『都市に生きる　石川栄耀縦横記』（作品社、1956年）、そして自分自身の人生について深く思考した『旧婚旅行』（青年社、1969年）といった著書からも十分理解できる。徳川義親は『都市に生きる』に寄せた序で「人間勉強の一つとして推薦したい」と書いている。また、『旧婚旅行』では、親友の奥村仁が、根岸を「自分自身に対決する場合にだけ真剣を抜いていて、世間に向かっては、巧妙に世俗向きの竹刀さばきをしている人間」の一人だと評している。おそらく根岸の都市計画事業家としての「世俗向きの竹刀さばき」は絶妙であっただろう。しかし、その竹刀さばきも、やはり根岸の人間理解への眼差しが根底にあったからこそ、人々に受け入れられたのではないだろうか。

根岸をはじめ、都市計画事業家たちの履歴と業績を理解することで、「都市計画」というもの、特にその技術的側面と表裏一体にある人間的な側面に対する豊かな展望が開けてくるように思う。人々が「都市計画」という世界に何を見ていたのか、その広がりを認識することが、都市計画を文化のレベルで思考することに繋がるだろう。

（2）石川栄耀との関係

根岸情治の履歴と業績は、石川栄耀抜きでは語れないことは、本稿で明らかにしてきたとおりである。根岸の履歴と業績は、石川栄耀に導かれたものが多い。特に名古屋時代に関しては、石川の都市計画の構想の中で、根岸は一つのコマとして、その部分部分の実現にひたすら尽くしていたというのが実情であろう。しかし、その後、函館、京城での仕事は石川との関係は薄く、ここで根岸は独自の経験を積み重ねた。戦時中、石川の推薦で東京商工会議所において国土計画調査を担当することになった際には、根岸と石川との関係は、石川の掌中で根岸が動くというのではなく、石川では届かない仕事を根岸が行うという石川を根岸が補完する関係に代わっていた。根岸の工場分散を中心とした国土計画調査は、石川の生活圏構想を補い、それがあえて主題としなかった経済や産業面での地方計画の樹立を目指したものであった。そして、戦後の日本都市建設株式会社、池袋駅東口地下街の建設は、石川栄耀が従来の都市計画の官僚独善的なスタイルに対して、新しい民主主義の時代の都市計画のありかたとして思い描いていた民間都市計画を実践するものであり、東京都建設局長であった石川自身が主導的に担うことはできなかった仕事であった。つまり、石川栄耀にとってみれば、当初は従弟ということで面倒をみていた根岸が、次第に石川の都市計画、国土計画の仕事に欠かせないパートナーとなっていったのである。石川は、その都市計画の思想や実践で名を残したが、特に石川が官の都市計画ではない、実質的に市民が支える「都市計画」を追い求めたその片鱗は、根岸の都市計画事業家としての仕事を通じて理解が可能である。

しかし、石川栄耀にとっての根岸は、仕事のパートナー以上の（もちろん従兄弟であり、親友であるという特別な存在ではあった）、更に重要な役割を担うことになった。その役割は、石川の死後、根岸が『都市に生きる　石川栄耀縦横記』（作品社、1956年）を執筆し、石川栄耀の人物像を書き残したことである。根岸は、この評伝において、石川を「神を信じ、神に頼れなかった男。芸術を愛し、芸術に没頭出来なかった男。学問にあこがれ、学問に殉職出来なかった男。俗世間を軽べつし、而も俗世間を無視出来なかった男」として描き、石川の「小都市を愛し、大都市を讃え、古きを尊びながら新しきにつく彼の幾重にもおり重なった精神過程」を露わにし、石川の都市計画を「彼の主張や学問上のねらいが、かなり大きな都市計画技術の革命であり、同時のその革命に対する疑問と反省に終始悩み続けていたらしい」と理解し、石川の人生を「運命的な孤独感にたえずいらいらと腹を立て、而もそれに歯向っていたのではなかったか」と解釈している。石川栄耀は数多くの著作を残している。そのユーモアのセンスにあふれた筆致で書かれた著作を読むことで、石川の人と人のつながりを基盤とした都市計画観はある程度、理解することができる。一方で、後学の者がいくら石川の著作を読み込み、彼の生み出した都市空間を体験しても、石川の人間性の中心、機敏な精神の核心に達することができないもどかしさが残る。根岸の著作は、従弟であり親友であり仕事上のパートナーでもあったという唯一の立場から（ということは、根岸の石川理解がある種の偏向性を持っていることには違いない。しかし人によってそれぞれの人間性への迫り方はもともと異なるので、ここでは問題にならない。）、そのもどかしさの原因となる部分に光を当て、言語化しているのである。石川がその後、我が国の近代都市計画の権威として「遠ざけられる」ことなく、現在的な問題意識の中で常に参照され続け、都市計画史の魅力的なテーマで有り続けている一つの要因は、根岸が書き残した石川に関する深い理解を目にすることができるからである。そして、根岸が描いた石川が、極めて人間的な寂しさと強がり、矛盾を抱え、それに対抗しようとしている、ごく普通の人間であったからである。

根岸は、石川栄耀自身が、少なくとも都市計画家として活躍するようになって以降、容易にはさらけ出すことのなかった石川栄耀という人物の人間性の中心を後世に伝えた人物であり、石川を常に身近な人間として生き続けさせることを可能とした。石川栄耀にとって根岸とは、人間・石川栄耀の生みの親であるとも言えるのである。

なお、本稿では、根岸情治の都市計画事業家としての履歴と業績を明らかにすることに関心を寄せたため、根岸の晩年の随筆集である『旧婚時代』をはじめとする根岸の著作、俳句、童話、また石川栄耀らと組織していた目白文化会の活動、そして徳川義親や藤山愛一郎といった人物たちとの交流関係等については十分に言及することができなかった。今後、機会を見つけて、補足していくことにしたい。

補　根岸情治著作一覧

・根岸情治（1927a）、『妊娠調節の実際知識』、資文堂
・根岸情治（1927b）、「遺伝と環境と妊娠調節」、人性、妊娠調節実験号
・根岸情治（1927c）、「妊娠調節の方法のうち絶産法を必要とする人」、人性、3巻5号
・根岸情治（1929）、「まんだん　丘の感傷」、都市創作、5巻5号
・葱青公（1939a）、「区画整理遍路記　其の一　名古屋の巻」、区画整理、5巻1号
・葱青公（1939b）、「区画整理遍路記　其の二　一宮の巻」、区画整理、5巻3号
・葱青公（1939c）、「区画整理遍路記　其の三　函館の巻」、区画整理、5巻6号
・葱青公（1939d）、「区画整理遍路記　其の四　京城の巻」、区画整理、5巻9号
・葱青公（1940a）、「区画整理物語　大地は微笑む」、区画整理、6巻1号
・根岸情治（1940b）、「京城の区画整理と土地の処分　土地相談所と土地分譲組合」、区画整理、6巻12号
・根岸情治（1941）、「京城の区画整理と土地の処分（二）

土地相談所と土地分譲組合」、区画整理、7巻1号
・根岸情治（1942a）、「蚤の糞　区画整理遍路記終篇」、区画整理、8巻4号
・根岸情治（1942b）、「土地区画整理と宅地建物等価格統制令の運用について」、京城集報、240号
・根岸情治（1942c）、「工業配分と労務配置に就て」、官界公論、8巻86号
・根岸情治（1942d）、「関東地方に於ける疎開工場の提唱とナチス・ドイツに於ける工場分散の実際」、商工経済、14巻4号
・葱青公（1942e）、「都市風土記（一）　関東地方都市めぐり」、区画整理、8巻10号
・葱青公（1942f）、「都市風土記（二）　関東地方都市めぐり」、区画整理、8巻12号
・葱青公（1943a）、「都市風土記（三）　関東地方都市めぐり」、区画整理、9巻9号
・根岸情治（1943b）、「工業の地方分散と労力問題」、農村工業、10巻3号
・根岸情治（1943c）、「都市分散と国土計画的土地政策の展開　―序論に代えて」、都市問題、36巻6号
・根岸情治（1943d）、「国土開発と地方開発の方法論的一考察（上）」、官界公論、9巻98号
・根岸情治（1943e）、「国土開発と地方開発の方法論的一考察（下）」、官界公論、9巻99号
・根岸情治（1943f）、「国土計画整備会発足」、商工経済、16巻3号
・根岸情治（1944）、「関東地方国土計画整備要項」、商工経済、17巻6号
・根岸情治（1945）、「国土計画的都市整備への展望」、都市問題、40巻2号
・根岸情治（1955a）、「都市風土記　池袋という街の生態」、新都市、9巻4号
・根岸情治（1955b）、「都市風土記　池袋という街の生態（二）」、新都市、9巻5号
・根岸情治（1955c）、「都市風土記　池袋という街の生態（三）」、新都市、9巻6号
・根岸情治（1955d）、「都市風土記　池袋という街の生態（四）」、新都市、9巻7号
・根岸情治（1955e）、「都市風土記　池袋という街の生態（五）」、新都市、9巻9号
・根岸情治（1955f）、「都市風土記　池袋という街の生態（六）」、新都市、9巻11号
・根岸情治（1955g）、「石川栄耀氏の断面　大いなる青年の死」、新都市、9巻12号
・根岸情治（1956a）、「都市風土記　池袋という街の生態（七）」、新都市、10巻2号
・根岸情治（1956b）、「都市風土記　池袋という街の生態（八）」、新都市、10巻4号
・根岸情治（1956c）、『都市に生きる　石川栄耀縦横記』、作品社
・根岸情治（1962）、「東京都大井町地区経済実態調査」、新都市、16巻1号
・根岸情治（1964）、『池袋風雲録　池袋地下街の出来るまで』、私家版
・根岸情治（1969）、『旧婚旅行　青公蘆随筆』、青年社

※この他、函館時代には函館新聞に長編「函館」を、京城時代には京城日報に連載「三十年後の京城」を寄稿している。『金の船』編集時代には同誌に童謡を寄稿し、京城時代には『楽浪』という俳句雑誌を発行していた。

参考文献

・中島直人・西成典久・初田香成・佐野浩祥・津々見崇、『都市計画家石川栄耀　都市探求の軌跡』、鹿島出版会、390頁、2009年
・高崎哲郎、『評伝　石川栄耀』、鹿島出版会、248頁、2010年
・孫禎睦（西垣安比古・市岡実幸・李終姫訳）、『日本統治下朝鮮都市計画史研究』、柏書房、437頁、2004年
・波多野憲男、「東京戦災復興における組合施行土地区画整理事業」、『東京　成長と計画　1868―1988』、東京都立大学都市研究センター、157－170頁、1988年
・小笠原正巳、「都市計画事業と特許会社　池袋地下道駐車場事業の概要」、新都市、18巻10号、26－31頁、1964年
・池袋地下道駐車場株式会社、『社史　10年の記録』、青年社、79頁、1969年
・池袋地下道駐車場株式会、『経緯書（会社設立まで）』、99頁、発行年不明
・秀島乾、「駅前広場計画試案」、日本建築學會研究報告　、34号、41－44頁、1955年
・秀島乾、「履歴書」、1968年